

三浦綾子論 (七) — 『天北原野』 —

* 小田島 本有

Motoari ODAJIMA

A study of Miura Ayako(7) — Tenpoku gen'ya(Tenpoku field)

一

『天北原野』は昭和四九年一月八日から五一年四月一六日まで『週刊朝日』に連載された長編小説である。単行本は上巻が昭和五一年三月三〇日、下巻が同年五月二〇日に刊行されている。舞台はサロベツ原野から樺太までの広範囲にわたり、大正時代から昭和の終戦前後までを描いた壮大なロマンである。作品中にハマベツという地名が出てくるが、これは現在の地名ではない。三浦光世は『三浦綾子創作秘話』(主婦の友社、平一三・一一二)の中でこのことについて、「問題を持つ人物が多く登場することもあって、綾子はあえて仮の地名にしたようである」と述べている。

二

いを持ち続けたことがあき子を踏みにじり、不倫に走らせ、自殺にまで追い込むことになっていく。孝介も、自分の欲望を押さえることのできない自己中心的な人間の一人である」と厳しい眼差しを向けている(『三浦綾子『天北原野の世界』、『日本文芸研究』第四一巻、平元・四)。綾子はクリスチャン作家として『氷点』以来、「原罪」ということにこだわってきた作家であった。『天北原野』でもその姿勢は全く変わっていない。

この作品においても三浦綾子のストーリーテラーとしての才能が遺憾なく発揮されているが、もともと婚約者同士であった池上孝介と菅井貴乃が須田原完治の横恋慕によって引き裂かれ、そればかりか半ば強引に完治が貴乃を妻とするこゝとで善玉(孝介・貴乃)と悪玉(須田原伊之助・完治父子)というように我々読者は登場人物を分けて捉えがちである。しかし、この作品は勧善懲悪をめざしているわけではないし、そもそも綾子はそのような単純な対立構造を目論んだわけではなかった。綾子は孝介や貴乃に対して批評的な視点を忘れていないし、一方でとりわけ完治の魅力を記述したりもして、それぞれの登場人物を多角的に捉えることを心がけていたのであった。そのことがこの作品に厚みを持たせることにもなっている。

たとえば、山本優子はこのことに関して、「孝介と貴乃は十字架を負わされる側の人間として描かれているようであるが、実は孝介が貴乃に対して変わらぬ想

まずは悪玉の象徴的存在として見られる須田原完治に眼を向けてみよう。

作田啓一はルネ・ジラルールの欲望の三角形理論をもとに、夏目漱石『こゝろ』を分析していた(『個人主義の運命 近代小説と社会学』、岩波新書、昭五六)。それによると、人間がある対象に欲望を抱くには媒介となるものが必要とされる。『こゝろ』の場合であれば、「先生」がお嬢さんに激しく恋をするには友人Kの存在が必要不可欠だった。Kがお嬢さんへの恋を告白することで、「先生」の心にお嬢さんを奪われたくないという意識が強くなり芽生えるのである。

孝介、貴乃、完治はハマベツの小学校での同窓生だった。もともと完治にとつて、貴乃は高嶺の花であつて恋の対象ではあり得なかった。ところがこの町の有力者である須田原伊之助のもとに仲人の依頼がある。それが孝介と貴乃の婚姻だったのである。完治は気さくな性格で人気もあつたが、時々癩癩を起すこと

があり、友人たちからは「完治のヤマセ」と恐れられていた。一方の孝介は校長池上太郎の息子であり、成績もよく周囲からの信頼を勝ち得ていた。このようにこの二人はあらゆる面で対照的な人物だったのである。

ところが父親から完治は孝介が近い内に結婚することを聞かされる。しかもその相手がよりによって貴乃であることを知らされ、完治は一気に逆上した。完治の中において〈憧憬〉が一気に〈嫉妬〉へと転じたのである。仮に貴乃が全く見知らぬ男の元に嫁ぐという話であれば、完治もあきらめがついていたのだろう。自分にとっては手の届かない貴乃が孝介のものになるという事実が彼には我慢ならなかったのである。

完治の様子を見てとった父親の伊之助は、仲人という立場でありながら「完治、ほしけりや、手に入れる。ほしいもんを手に入れるのが、男つつうもんだ」と挑発する。この言葉が完治を刺激したのは言うまでもない。しかし、この後完治が校宅に放火をして校長を左遷させたばかりか、貴乃を力づくで犯していれば疵物とし無理やり結婚を強要することになるとは、さすがの伊之助にも想像がつかなかったに違いない。

実は仲人を伊之助に頼んだことを父親から聞かされた時、孝介は懸念を示していた。父親の太郎もその思いがなかったわけではない。だが、この結婚を成立させるには、腕のいい大工だが「変わり者」と呼ばれている貴乃の父親をどう説得するかが大きな課題だった。「あのおやじさんと話をすすめるには、やはり須田原の大将が一番と思つての」と太郎は語っている。須田原は町のボスであり、面倒な話もよくまとめた。それに小さな町で校長の立場にある彼が須田原を無視するわけにはいかない、という大人の事情もあった。だが、池上太郎は菅井兼作という男を誤解していたと言わざるをえない。兼作は職人気質の男であった。相手がいかなる人物であれ、自分の筋は通す。それが時には偏屈な男と見られてしまうことにもなった。作品を通してこの兼作の考え方や行動には首尾一貫したものがああり、事実孝介は終始彼に対して一定の評価をしていたのだ。太郎が伊之助に仲人を依頼したことによって歯車が狂ったのである。

三

校宅の火災の責任をとらされ、校長一家はハマベツを離れることになった。孝

介はこの火災について当初から疑念を抱いており、納得がいかない彼は教員を辞め新天地を求めて樺太に向かう。このため孝介と貴乃の結婚も先延ばしということになった。ハマベツを離れる際、孝介は貴乃に「三年経ったら必ず迎えにくる。お貴乃さん、待っていてくれるね」と言い残している。

そして、本来なら結納が交わされる予定だった日、貴乃は完治に身体を奪われた（完治は兼作が家にはいないことを承知の上で菅井家を訪れたのである）。これが貴乃にとつてどれほどのショックであったか、想像に難くない。貴乃はつらい手紙を孝介に送った。だが、孝介からは全く音沙汰がない。このことに貴乃の父親である兼作もさすがに腹を立てている。貴乃が待っていたのは他ならぬ孝介からの言葉であった。では、このとき孝介はどうしていたのか。

犯されたからといって、貴乃が完治に嫁ぐとは、孝介には、想像もできなかった。身勝手のようなだが、自分以外の男に貴乃が嫁ぐとは、思いもよらぬことであつた。もし、自分と結婚できなければ、貴乃は一生一人で暮らすにちがいないとさえ思っていた。貴乃はそういう女だと思つていたし、それが一旦結婚を約束した男と女の生きる道だと孝介は信じていた。

もし結婚するとしても、自分のゆるしも得ずに、何のこだわりもなく嫁いでしまうとは考えられなかった。孝介が貴乃に返事を書かなかったのは、書けなかったからだ。むろん絶交のつもりでも、婚約破棄のつもりでもなかった。書けるようになれば書くつもりであつた。

（絃歌）

孝介は「書けるようになれば書くつもり」だった。だが、「つもり」では相手には伝わらない。彼には、少なくとも貴乃は三年間待つてくれるという信頼があり、彼はその信頼にもたれかかってしまったのである。決定的だったのは、いざという大事なときにコミュニケーションが不足してしまったという事実だった。貴乃が犯されてしまったというのはいわば想定外の事態である。人間はいざという時にその人間の器が試される。その点で当時の孝介は貴乃に対する配慮が欠如していたと言わざるを得ない。貴乃は一番孝介からの言葉が欲しい時に彼からの言葉をももらえなかった。彼女はそのことで絶望感に打ちひしがれ、完治からの執拗な結婚の要求に応じたのである。いったん彼女は自殺も考えた。しかし、彼女の姉である菊乃が嫁いで間もなく亡くなり、その時肩を震わせて泣いていた兼作の姿

を思い浮かべ、いわば死んだ気になって嫁ぐ決心をしたのだった。「何のこだわりもなく」嫁いだわけではない。

教え子でもあった須田原あき子（完治の妹）から完治と貴乃の結婚を告げる無邪気な便りが届き、孝介は大きな衝撃を受けた。「なぜ、半年やそこら、自分の手紙を待つことができなかったのか。こともあろうに、なぜ完治のもとに嫁いだのか。孝介は貴乃を恨まずにはいられなかった」（絃歌）という記述が見られるが、このような結果に至るまでどれほどの葛藤が貴乃の心の中であったのか、孝介は推測することができない。

孝介は誠実かつ真面目であり、頭の良さが長所となっており、周囲の評価も高い。しかし、それらの長所がこのような事態に直面した場合には何の意味も持たないのである。森鷗外の『舞姫』では、エリスが発狂する直前に「我が豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」と叫んでいた。豊太郎自身はエリスを欺くつもりはなかったのかもしれない。自分が人事不省の状態になっている際に友人の相沢謙吉がエリスに豊太郎が天方伯の要請を受け帰国に同意した、という話をしたため彼女が発狂してしまったとの思いが残ったのだろう。作品の結末で豊太郎が相沢謙吉に対して憎む心が残っていることを告白しているところに、太田豊太郎という人物が見えてくる。責任を相沢に転嫁している限り、豊太郎は自分の問題点に気づけない。確かにエリスが発狂する引き金を引いたのは相沢だったかもしれないが、そもそも豊太郎がエリスに将来の二人の関係について殆ど語らなかったことが根本の原因だったのである。

孝介の愛読書の一つに尾崎紅葉の『金色夜叉』があった。彼はこの本を貴乃に贈る際、「女に裏切られた男の気持ちで、必ずしもこんなものとはぼくは思わない。ぼくなら、もっと寛い心で許すと思うよ」と述べていた。鳴沢宮に裏切られ、その後酷薄な金貸しになっていく間貫一に対して若い孝介は批判的な眼を向けていた。だが、この時の言葉がいかに青臭いものであったか、彼は後にそのことをしたたか味わうのである。貴乃に裏切られたと思ひ込み、決して寛大にはなれない彼がそこにはいた。一方の貴乃も、その当時は宮の心が理解できず、「自分ならどんなことがあっても、孝介から離れることは、あり得ない」と思っていたのである。だが、物事は彼らの思いとは裏腹な形で展開した。要するに、この世では「絶対」ということはあり得ないということなのである。

四

孝介は十年後、突然須田原家に現れる。樺太に渡った孝介は桜井五郎治との出会いがきっかけとなって網元となり、今では莫大な資産家となっていた。そして驚いたことに、彼は完治の妹であるあき子と結婚したいと申し出たのである。

あき子は孝介の代用教員時代の教え子であり、彼がハマベツを去る際、「先生、行くな！」とむしやぶりついたのが当時六年生の彼女だった。孝介はその時のことが忘れられないとして、結婚を申し出たのである。だが、この求婚はあき子を愛するがゆえのものではない。彼の本音は義姉となる貴乃の近くにおいて、彼女の力になってあげたいということだった。ここに孝介の犯した大きな罪がある。特定の人を愛し続けるというのは、一見するといかにも美しいように思える。だが、相手はいまや人妻であり子供もいる。自分も妻帯するのであれば、もはや純粹な一対一の関係ではあり得ない。この結婚に反対し不安を抱いたのが孝介の母サダであった。サダは息子が須田原の娘と結婚するということが自体が信じられないことであったし、何よりも息子が幼い頃から執着心が強かったことを懸念したのである。サダは息子の真の目的が貴乃にあったことを的確に見抜いていた。事実、孝介の思いはいまやエゴイстикなものになっていったし、それは愛というよりも執着と言われても仕方がないものだった。そしてこの一件が後の災いを生み出す大きな要因ともなったのである。いずれにせよ、孝介は自ら厳しい状況を作り出し、それゆえ苦悩を深めることになった。それは『氷点』における辻口啓造、徹父子にも同様に見られる傾向である。

いざ結婚したものの、孝介はあき子に指一本触れようともしない。あき子が完治の妹であること、さらには貴乃を慕う思いが妨げとなり、孝介はあき子との間に溝を作ってしまうのである。このことに不満を募らせたあき子がピアノの個人教師として家に来ていた白系露人のイワン・シーモノフを誘惑することになった。青い目の子供を産むこと、それが孝介への復讐の念だった。やがて彼女は妊娠するが、これら一連のことはもともと孝介が種を蒔いたものである。

ただ、孝介もあき子を処女妻の状態にしていたことをよしとしていたわけではない。彼が後に新婚旅行をあき子に提案したのも、局面を打開したいという願いが込められていた。このように孝介は頭の中でいろいろ考える。だが、その真意はなかなか相手に伝わらない。

孝介にとって、貴乃がいつまでも「過去の人」でないことは明らかであった。その端的な例として、彼が誰もいない時を見計らい、貴乃に電話を入れる場面がある。

「いや、すまないのはぼくの方だよ」

「いいえ、わたしが悪かったんです。許して下さいね……。でも、何もかも、みんな過ぎたことですね」

「何もかも、みんな過ぎたこと？ お貴乃さん、それならどんなに楽だろう。

ぼくは……。ぼくにはお貴乃さんは、過去の人ではないんだ」

思わず声がうるんだ。

「そんなこと、おっしゃってはいけません。孝介さんには、あきちゃんという立派な奥さんがいるのですもの」

「お貴乃さん……。ぼくは悪い男だ」

「何がです？ 悪いのはわたしです。わたしがじつと孝介さんの手紙を待つていれば……」

「お貴乃さん、ひとこと、ひとことだけ聞かせて下さい。君はもう、あのハマベツの、十一年前のお貴乃さんじゃないんですか」

「……」

「ひとことだけ、聞きたいんです。ぼくに対する気持ちは、すっかり変わったのですか」

「孝介さん、そんなことをお聞きになつてはいけません。わたしは完治の妻です」
(「ループ線」)

孝介は自らを「悪い男」と言う。この引用部分の後でも「未練な男」とも言っている。これら卑下した言葉は必ずしも彼の反省の度合いを示すものではない。彼はむしろこれらの言葉にもたれかかって貴乃にすがろうとしているのである。いかにも女々しく、これらの言葉で人妻である貴乃をかえって苦しめている。引用部分の後半で貴乃が沈黙していることの意味がどれほど彼には分かつていたのだろうか。「孝介さん、あなたは、去年から幾度もお会いしていながら言葉に出さなければ、おわかりにならないんですか。」と語る貴乃の言葉は重い。

「孝介さん、さようなら。今日のお電話は、生涯忘れません……。でも、今日のお電話は、聞かなかったことにします。これからは、わたしと孝介さんは、嫂と弟以外の、何ものでもないことよ」

「……いやだ！ ぼくはいやだ。ぼくは、お貴乃さんを、ねえさんなどと決して思いやしないよ。お貴乃さんは、ぼくのお貴乃さんだ。ぼくだけの」

ふいに、ほら貝が鳴った。はっとした時、貴乃の受話器をおく音が聞こえた。
(「ループ線」)

貴乃は孝介に対して冷淡だったわけではない。下手をすれば孝介の言葉に引きずり込まれそうになる自分の弱さを感じていた。彼女の毅然とした態度は彼女自身のためであり、ひいては孝介のためでもあった。

五

完治の母が脳溢血で倒れて危篤であることが伝えられ、完治が山の造材所から家族の待つ豊原まで大ざりて戻ろうとする際吹雪に見舞われ立ち往生する場面がある。このとき完治は生命の危険に晒されるわけだが、なかなか完治が戻らず、娘の弥江から貴乃は「ね、お母さん、お父さん死ぬの？」と尋ねられた。

「死にませんとも」

貴乃は弥江の頭を撫でた。孝介の目がちらりとかげった。

「よかった！」

弥江がにっこりする。加津夫が、

「どうしてさ、母さん。どうして死なないってわかるの」

と、ふしぎな顔をする。

貴乃が、ふつと孝介の顔を見て、困ったように微笑した。孝介は、

「それはね、弥江ちゃん、お母さんには何となくわかるのさ。お父さんとお母さんというのは、そういうものなんだよ」

貴乃が、ちよつときびしい顔で孝介を見た。加津夫が、

「ふーん。何となくわかるの？」

と、わかったような、わからぬような顔でうなずいた。

(「白魔」)

弥江、加津夫という子供たちの前で母親の貴乃、叔父の孝介が会話をしている場面だが、ここで注目したいのは貴乃と孝介が直接語り合っていないことである。彼らは子供たちに向かつて話しているのだが、お互いを意識し合っていることが分かる。「死にませんと」と断言する貴乃の言葉に対して孝介の目がかげつたのは、そこに夫の無事を祈る彼女の姿を見出して嫉妬を覚えたからであるし、「お父さんとお母さんというの、そういうものなんだよ」という孝介の言葉を聞いて「きびしい顔」を貴乃が見せたのは、自分が孝介から遠ざけられたような感覚を覚えたからだろう。そのような微妙な心の揺れが二人の間にはある。当然のことながら子どもたちには窺い知れないことだ。

だが、孝介の貴乃に対する思いはずっと変わらなかった。それは完治が芸妓の梅香と深い仲となつて家を空けることが多くなつたことを懸念し、梅香に落籍の話を持ちかけたことにも端的に表れている。この落籍の話は孝介が梅香を愛人にするわけではなく、しかも梅香が札幌で店を出すための出資をしようというもので、梅香にとつて信じがたい話であつた。孝介はとにかく梅香を完治から遠ざけようと考へたのである。たとえ梅香を遠ざけても完治がまた別の女性に手を出すことは目に見えており、これが本質的な解決にならないことも孝介は十分承知している。梅香を抱える料亭花の家のおかみは孝介のよき話し相手であり、彼と貴乃のそれまでの経緯も承知していた。彼女は改めて孝介の貴乃に対する思いの深さを慨嘆してもいる。

落籍の話は梅香から完治にも伝えられた。梅香にしてみると、この話を持ちかけることによつて完治にいい条件で落籍してもらいたいという狙いが込められていたのである。完治はこの落籍の話の妹のあき子にした。その際、完治は自分と梅香の関係を伏せたまま、孝介からの落籍の話に迷惑に思つた梅香が自分に相談してきたものとして伝えている。この話を聞いたあき子は夫が愛人の梅香を落籍しようとしていると思ひ込み、このことがイワンを誘惑しようとする気持ちに拍車をかけることになつた。また、落籍の話は完治から父親の伊之助にも伝えられたため、孝介についての良からぬ噂が広まることにもなつた。

完治が自分に都合の良いように事実を捻じ曲げて伝えるのはこの時ばかりでない。梅香の孝介に対するイメージは完治からもたらされる言葉が大きく影響していたのである。後にあき子はイワンの子を産むことになるが、孝介はその子を

元桜井漁場にいた支配人の息子夫婦の子供として籍に入れてもらい、後に養子として受け入れる方法をとつた。この子は京二と名づけられたが青い目をしており、混血児であることは見紛ひようになつたのである。この事情を把握していた人間はごく限られており、伊之助・完治父子も知らなかつた。完治は京二を孝介がロシア女性に産ませた子供であると思ひ込み、そのことを梅香に伝えている。また、孝介が資産家の網元となつたのは桜井漁場の権利を幸運にも引き継いだだけと伝えており、自分が事業を再開するにあつて孝介から莫大な融資を受けていたことを伏せていた。そのような情報を与えられていた梅香が一見すると紳士的な孝介を、裏表のある人間と解釈したのも無理からぬところがあつたのである。

あき子がイワンの子を妊娠したことは孝介にとつて言うまでもなく大きな衝撃だつた。だが、ここで注目されるのは孝介がすべてを引き受ける覚悟を見せたことである。京二は紛れもなく混血児であり、もらい子という形で育てるとしてもそれが不自然に見えるのは避けられなかつた。まさかあき子が白系露人の子を宿したと考へる人はいない。周囲の好奇な眼差しや噂をすべて我が身に負う覚悟を孝介はした。それはあき子をこのような状況に追い込んだそもその責任が自分にあることを孝介が認識していたからである。このような姿を貴乃は見つていた。

(あの人は、あきちゃんの罪を負わされて生きている)

貴乃はたまらなくなることがある。孝介はいつも本当に、人の罪の飛ばつちりて生きているような気がしてならない。完治のために、結婚寸前この自分を奪われ、あき子もまたイワンに身を任せた。その上、あき子の生んだ子を、孝介の子ではないかとささやかれている。

この冬、貴乃は孝介に言ったことがある。

「何だか、あきちゃんの罪をあなたが負わされてしまったみたいで
ありませんわ」

孝介は静かに言った。

「負えるものなら、ぼくが負いますよ。少々重くても耐えられる限りはね」
その時の孝介の静かさが、ひどく貴乃の心に沁みた。孝介は、いつのまにかゆるぎのない人間に成長したと貴乃は思つた。あき子の罪も完治の罪も、黙つて負っている孝介の心の中は、一体どんなだろうと貴乃は時々思う。その孝介の荷を、自分も分けて負う思いで、貴乃は京二をかわいがる。孝介に遠慮をし

てか、京二をうとんずるあき子にも代わってかわいがる。祝福されずに生まれて来た京二に対する時、貴乃が心が大きくなる思いがする。(「赤紙」)

貴乃はこのとき孝介の人間の偉大さを見出した。かつては女々しい姿を見せていた彼であったが、つらい経験を乗り越え彼が大きく成長したのを貴乃は感じ取ったのである。孝介が抱えたものの重さを感じるからこそ、貴乃はその幾分かなりとも負いたいと願う。それが京二をかわいがるという行為につながった。

京二を引き受けたことは孝介にとって、いわば罪を引き受ける覚悟の表れだった。だが、あき子にとって京二を絶えず目にするということは、いわば自分の過ちを見せつけられることに他ならない。あき子にとって孝介の行動は自分に対する復讐としか思われなかったのである。

六

孝介の最大の罪は、貴乃に対する執着を捨てきれず、彼女の近くにいたいがためにあき子を利用したことだった。しかも教え子のあき子が自分を好いてくれていたことに乗じたという点で、狡猾であったとすら言える。しかもあき子に同情すべき点があったとすれば、かつて孝介と貴乃が婚約者同士であったこと、そこに兄の完治が介入し、校宅に放火してこの二人を引き裂いたこと、さらには貴乃を犯すという卑劣な手段で完治が結婚を強いたという一連の事情を全く知らされていかなかった点に求められる。

したがって、いざ憧れの孝介と結婚したものの相手は自分に指一本触れず、処女妻の状態に置かれたことに彼女が不満を持ったのは無理もない。だが、事情を知らない周囲の者たちは彼女を幸せ者だと単純に考える。

「だって……」

何か言いかけて、

「本当にねえ、幸せすぎるのねえ、わたしは」

あき子は再び声高に笑った。

「とにかく、あき子、金がうなるほどあるというだけでも、幸せなもんだ」

「そうねえ」

「その上、立派な家もある。男が仕事で、少々家をあけるのは当たり前のことだ」

「そうねえ」

「それによ、しっかりした夫婦が住みこんでいるわけだし」

「そうねえ」

あき子はいつの間にか、淋しい微笑を浮かべている。

(略)

貴乃はブルーの角巻きを着、銀狐の毛皮を首に巻いたコート姿のあき子と並んで家を出た。千代が背中では機嫌のよい声を出した。

「千代はいい子、いい子ねえ」

貴乃が言った。あき子が貴乃の角巻きの中の千代をそっと見て、

「幸せねえ、おねえさんは」

と吐息をついた。

(「華燭」)

あき子はここで自分を「幸せすぎる」と言って声高に笑うが、それは本心からものではない。周囲から幸せな理由をいろいろ挙げてもらうが、彼女はただ「そうねえ」と返事をするばかりであり、最後は「淋しい微笑」を浮かべている。そして、赤ん坊の千代をあやす貴乃の姿を目の当たりにして、彼女は思わず「幸せねえ、おねえさんは」と言わずにいられない。ここにはあき子の貴乃に対する羨望の思いが伺える。彼女が求めている「幸せ」はまさにこれなのだ。結婚しても出産の機会さえ与えられない自分を彼女は空しく感じている。

「幸せ」という認識の違いについては、京二をめぐる孝介とイワンの発言の中にも伺える。イワンはあき子と別れることを孝介から言い渡された直後から失踪した。その結果、あき子が妊娠したことすら知らなかった。しかし、四年後たまたま京二を連れ戻した孝介らがイワンと偶然再会する場面が下巻で書かれている。京二が自分とそっくりであることに驚いたイワンは、それが自分の子供であることに気づいた。

「コドモガウマレタトハ、シラナカッタ」

「しかしねえ、イワン。君には関係がない」

「ナゼ？」

「あの子は君の子ではない」

「シンジラレナイ」

「あの子は幸せだ」

「シアワセ？」

「そうだ。幸せだ。ぼくが育てている」

「オクサンハ？」

イワンは貴乃のほうを見る。

「あき子は豊原にいるよ。赤ん坊がいるので、一緒に来なかった」

「アカンボウ？ ダレノコデスカ」

「ぼくの子だよ、もちろん」

イワンは薄笑いを浮かべて首を横にふった。

「ダンナハ、アキコト……オクサント……」

再び彼はひっそりと笑った。

「あき子はぼくの妻だ。子供はぼくの子供だ」

(「ツンドラ」)

イワンはあき子が夫との関係がうまく行かず、その結果自分を誘惑したこと気に気づいていた。それでも年下の彼はあき子を本気で愛したのである。その孝介とあき子の間にその後赤ん坊が生まれていると聞かされ、イワンは薄笑いを浮かべたのだ。そしてイワンの目の前には紛れもなく自分の子供がいる。だが、孝介はその子を「ぼくの子供」と言い切り、「あの子は幸せだ」と断言する。そしてこの引用部分の後で、孝介は「イワン、君は独り者だと言ったね。子供がいては、嫁になってくれる人は、なかなかいないよ」と付け加えるのである。これはイワンを思いやる言葉であると同時に、イワンを傷つける言葉でもあった。

後日、豊原の街をあき子が京二を連れていた時にイワンと偶然会う場面がある。孝介からあき子が豊原に住んでいると聞き、彼は訪れたのだろう。彼はあき子に唐突に「アキコサン、キョージヲクダサイ」と言う。

「アキコサン、オヤジガ、キョージヲソダテタイト、イツテイマシタ。ボクモサンセイデス」

「……」

「ソノホウガ、キョージモシアワセデス、アキコサンモ、シアワセデス」

イワンの声はやさしかった。そのやさしさは、京二の持つやさしさを思わせた。(「貯炭ストーブ」)

孝介は自分が京二を育てること、イワンに子供がいない方が「幸せ」であると考えている。一方のイワンは自分が京二を引き取って育てることが京二にとってもあき子にとっても「幸せ」であると考えている。京二の目が青いということがそう考える最大の理由となっているのだろう。

七

下巻の最大の山場は、事の真相を知ったあき子が出征先から帰還する孝介を迎えるその当日に首吊り自殺をする場面である。彼女に真相を伝えたのは長兄の達吉であった。そのことを知らされるまでのあき子はむしろ鈍感ですらある。

たとえば、皆が顔を合わせている時でも孝介と貴乃が互いによそよそしく見えることには気づいても、彼女は二人が互いに嫌っているからだと解釈していた。兄夫婦は恋愛結婚だと信じて疑わず、貴乃に「ねえさんは兄さんみたいな人がタイプなのね」とまで言っている。

そもそもあき子は身贖ということもあって、身内に対する見方は甘いところがあった。彼女はあるとき貴乃との会話の中で、「ま、父さんも兄さんも、みんな割合いいほうよね、須田原の家は」と言い、聞いていた貴乃が「何も知らぬあき子には、完治も伊之助もよく見えるのか」と思う場面がある(「白魔」)。

だが、兄の達吉の話はあき子を根底からぐらつかせた。すべてのことが明らかになった今、彼女は自分が利用されていたことを知るのである。孝介が貴乃に近づこうとして自分に求婚したことも、それを父や兄が賛成したのも結局は孝介が資産家であることが最大の理由であることも。そして周囲は知っていながら自分だけが知らされなかったという事実には彼女は愕然とした。かつて彼女は孝介と貴乃がよそよそしいことを互いに嫌っているからだと解釈していたが、事実はそうではなかったのである。

そうなると、あき子が孝介と貴乃を見る目つきも変化してくる。だがあき子はこの二人に不満をぶつけることもできない。そして彼女の不満が爆発したのは、

伊之助・完治父子の間でたまたま「じゃ、毛唐の女はどうなんだ」という話題になり、「ああ、そうか、こりや孝介に聞きやわかるな」と完治が放言した時だった。怒りに震えた彼女は、京二が自分がイワンとの間で産んだ子であることを宣言したばかりか、孝介の心の中にはずつと貴乃がいたこと、その貴乃を完治が引き裂いたばかりか、校宅に火をつけたことまで一気に暴露したのであった。そして彼女は「今にわかる日が来るわ。兄さんの犯した罪に時効はないってことも」という不吉な言葉を残したのである（「水脈」）。そしてその四か月後、召集されていた孝介が帰還する日、あき子は自宅の二階で首を吊って死んだのだった。

あき子は死に際して遺書を残していた。遺書を残して自殺を試みるという点では、我々は既に『氷点』の辻口陽子を知っている。陽子とあき子はこのように置かれた状況が似ている。それでは両者の違いはどこにあるのか。

陽子はそれまで辛い状況の中にあっても、「自分さえ正しくあれば」というのが彼女のいわば生きる支えになっていた。それは彼女の健気さでもあったが、見方を変えればそれは純粹培養された「正しさ」だったのである。夏枝に「おまえは殺人犯の娘だ」と言われたことで、彼女は自分の体の中にもその血が流れていることを感じ、それまで自分が頼りにしていた「正しさ」が根底からぐらつき、自殺を試みるのである。彼女の遺書には、それまで自分を虐げてきた夏枝を恨む言葉は全く書かれていない。そうせざるを得なかった夏枝の心に思いを巡らすのである。そして彼女は「ゆるしがほしい」と書き添えずにはいられなかった。

だが、陽子には一つ誤解があった。彼女は殺人犯の娘であると言われたことで、自分も人を殺す可能性のある人間であることを自覚した。しかし、陽子に限らず誰でも場合によっては人を殺す可能性はある。そうならないために我々はどうすべきかを考え、対処しなければならぬ。そこに人間の知恵が生まれる。周囲の邪悪なものを拒絶して守られていた彼女の「正しさ」は、その点で脆さも併せ持っていた。ただ、幸いなことに彼女は何とか命を取り止めることができた。『続氷点』では、自らが継っていた「正しさ」とどう向き合わねばならないか、そもそも人間が矛盾を抱えた人間であるという現実を認めることができるのか、というのが重要なテーマになってくるのである。

一方のあき子は、遺書の中で「兄が犯した罪を、先生どうぞお許しください」と述べていた。さらに彼女はこうも書いていたのである。

京二と澄男を、一緒につれて行こうかと、一時は思いました。本当にそれは迷いました。残される二人のことを思うと、気の狂いそうな思いです。でも、二人の子は、わたしとは別の命なので、置いて行くことにしました。道づれにするのは、あまりにもかわいそうに思われます。道づれは、一人だけでいいと思います。お腹の子は連れて行きます。イワンの子です。

先生、お許しください。わたしはもう駄目な女となりました。妻と呼ばれるにふさわしくない女になりました。（「水脈」）

彼女はこの遺書の中では、「妻」としてではなく「教え子」の立場になっている。それは孝介が自分にとって「夫」というよりも「先生」の方がふさわしかったという思いがあるからだ。

彼女はイワンとの再会后、再び彼の子供を身ごもっていたことを告白した。同じ過ちを繰り返す、という業の深さを彼女は体現していると言えるかもしれない。それだけ彼女は心に淋しさを抱えていたのである。

この作品の中では、待ちきれなかった女性が二人いる。一人は貴乃、もう一人があき子である。貴乃の場合、あらかじめ孝介が言っていた三年を待てなかった。あき子は孝介が夫婦関係を打開する意図で新婚旅行を企画していることも知らず、イワンとの関係にのめり込んでしまった。だが、そのことだけをもって二人を責めることは酷であろう。なぜなら、いずれも孝介の動きの鈍さがその背景にあるからである。それは彼の慎重な性格と表裏一体のものだ。誰が悪いと一方的に特定することじたいが不可能なのである。

八

『天北原野』ではとりわけ下巻において若い世代にも多くの頁が割かれている。ここでは須田原加津夫、弥江の兄妹に眼を向けてみたい。二人は完治、貴乃の子供である。

加津夫は長男であり、ある意味において完治の性格を受け継いでいた。特に中学時代には、金に執着したりスリルを好んだりしたりするようなもの、悪い面が顕著に現れるようになった。幼い頃から人なつこさがあったものの、その頃には友人の小泉渉のような初々しさがなく、貴乃が感じるようになっていた。

である。いわゆる反抗期にぶつかっていたということもあるだろうが、時代は戦争に傾斜していた頃であり、どうせ自分は短い命なのだという投げやりな気分も反映していたのである。

その加津夫がこともあろうに、父親の妾である梅子（梅香）の誘惑に乗り、深入りするようになる。きっかけは彼女が金をくれたことであつた。味をしめた彼女は、友人の家に泊まると嘘をついて彼女の家に泊まるようになったのである。

そもそも梅子は複数の男性と肉体関係を持っていた。若い加津夫の身体は彼女にとって魅力的だったのであり、彼はその誘惑に抗することができなかつたのである。梅子と肉体関係を持つようになってから、加津夫はその凶太さ、ちゃらんぽらんさが前面に出てくるようになる。

その象徴が、梅子の家で彼が完治と偶然鉢合わせとなり、謝るところか決して悪びれなかつた場面である。このとき加津夫は自分は父親と同じことをしているという意識があつた。当然完治は息子に怒りを覚えるのだが、そこに自分の分身を見出したことも否めない。

この事実を後に知つた貴乃が愕然としたのは言うまでもない。貴乃はそれまでの人生で数々の試練を与えられてきた。その際に、彼女の側で自分が忍耐さえすればいいという思いがあつた。その点は『氷点』の陽子と酷似している。

だが、彼女のそのような態度が問われている。すなわち、完治が梅子を妾にし、その事実を隠そうともしないことを結局黙認することになつたからである。「男ならだれでもすること」というのが完治の口癖だつた。その同じ言葉を加津夫が発するようになっていた。貴乃は思わず加津夫を殴りつけたが、このときの彼は良心の呵責がまつたくない。

今もそのことを思い出すと、体がふるえる。自分が完治に犯されて以来、完治の女遊びも、妾を囲うことも、自分さえ我慢していたら、それで八方はおさまるものだと耐えて来た。が、その時はじめて自分だけが忍べばそれですべてがおさまるような、そんな甘いものではないことを、貴乃ははつきりと知らされた。完治の犯した罪は、いつしか加津夫をも蝕んでいたのだ。

（貯炭ストープ）

人は必ず他者との関わりを避けられない。そうすると個人だけの問題ではなく

なってくる。作者はそのことを訴えているのだ。

一方、弥江は長女であり、容貌も母親に似ていて、ある意味において貴乃の分身的存在であつた。この作品で注目すべきことは、弥江が成長と共に叔父である孝介に対する思慕を募らせていく点である。完治が召集されているとき、伊之助の勧めもあつて、孝介と貴乃がそれぞれの子供を連れて礼文旅行をする（このとき伊之助が旅行を勧めたのは、女中の友子に手を出すためであつたことが後に分かる。また、このときあき子は澄男が小さいからという理由で旅行には参加しなかつた）。「弥江は叔父さんが大好きになつた」と彼女は言う。そして、彼女は孝介が時々自分の母親を「お貴乃さん」と呼ぶことに気づいていた。それは彼女がそれだけ孝介に意識が向いていたからである。

あき子と女学校に通う弥江がこのような会話をしている。

「あら、そんなこと弥江ちゃん羨ましいの」

「羨ましいわ。第一ね、叔父さんみたいな人と結婚したら、わたしなら何の文句もないわ」

「弥江ちゃん、そんなに叔父さんが好き？」

「好きよ、大好き！」

涼しく見張つた瞳が、一瞬キラリと光る。女の目だと、あき子は思わず、

「母子二代ね」

「母子二代？」

「げんげんな弥江のまなざしに、

「ああ、母子じゃないわね、あたしと弥江ちゃんは。叔母姪二代」

と声高くあき子は笑う。

（犬の声）

この時点で、あき子は既に兄の達吉からかつて孝介と貴乃が恋人同士であつたことを聞かされていた。思わず彼女が「母子二代」と洩らしてしまったのはそのためである。そしてあき子が自殺して孝介が独身となつた後、あき子は台所で貴乃に、「孝介叔父さん、もう結婚しないつもりかしら」と言い出す。

「叔父さんはまだ四十五でしょう」

「そうね、お父さんと同じだから」

「お父さんと同じには思えないわ。お父さんの額は禿げ上がって来たけど、叔父さんの髪はふさふさと黒くて……。わたし、叔父さんに一生お嫁さんが来なければいいと思ってるの」

（怒涛）

このとき弥江は二十歳を迎えていた。叔父に心が深く傾斜していくさまを目の当たりにする貴乃の思いはどのようなものだったのだろうか。孝介は弥江からすれば叔父である。当然のことながら結ばれることは不可能だ。しかし、弥江の中で孝介がしだいに大きな存在となっているのは確実であり、そのことに貴乃は不安を覚えたに違いない。終戦直後、樺太から北海道へ戻る船に乗った弥江はソ連の魚雷を受け亡くなるが、もしこれがなかった場合、ドラマは別の展開をみせていたのかもしれない。

新興丸には弥江、千代（弥江の妹）、澄男（孝介の息子）、サダ（孝介の母）が乗っていた。同じ船には貴乃と京二も乗るはずであったが、京二がお腹をこわしてトイレに行きたいと言いつつ、貴乃が付き添ったため乗り遅れてしまったのである。結局これが運命の分かれ目となってしまった。

魚雷を受ける直前、サダと弥江の間にこのような会話が交わされている。

「やさしいねえ、弥江ちゃん。お母さんにそっくりだよ」

弥江は恥ずかしげに笑う。

「うちの孝介も、お貴乃さんをもえば……言うことはなかったのに」

思わず愚痴った言葉に、弥江が涼しい目を大きくひらく。

「あら、孝介叔父さん、お母さんを好きだったの？」

サダはあわてて、

「いや、そうじゃないけど、あんなお嫁さんをもらってくれたらと思ってるねえ」とごまかす。が、弥江は、はじめて孝介の貴乃に対する気持ちを知った。

「そうだったの、おばあちゃん。孝介叔父さんは……」

（怒涛）

このようにして弥江の孝介に対する思慕も藻屑となって消えたのである。そして、完治も樺太から引き上げる際に小舟を奪って霧の中に消えたまま消息を絶ててしまった。

ひと頃はいい加減だった加津夫も、出征体験で戦争を目の当たりにしてから変わった。そして、彼は弥江によく似た池野汀という女性と出会い、彼女と結婚したい旨を孝介や貴乃に伝える。二人の結婚は孝介・貴乃が果たせなかったことを若い世代が実現することを意味しているとも言える。

加津夫は孝介に自分の母親をもらってくれと頼んでいた。完治が行方不明となつて時間が過ぎていた。「ぼくが結婚するのに、母さんにいられては邪魔だからさ」と加津夫は冗談めかして貴乃に言ったが、そこには母親を思う気持ちがあった。孝介は三年間消息不明だったら結婚を申し込むと、加津夫に約束したのである。孝介が貴乃に語った「希望」とはそのことをさしている。

そのような中、貴乃は嗜血をした。貴乃はこの事実を誰にも告げず、自らの死を覚悟している。しかし、彼女はそのことを恐れていない。むしろ、先になくなった弥江や千代に会えることを期待してすらいるのだ。

ある時、貴乃は孝介にサロベツのエゾカンゾウが見たいと頼む。この作品の冒頭、恋人同士だった頃、二人はこの花が好きだと言った思い出がある。二人にとってこれは思い出の花だったのだ。二人の結婚に希望を見出す孝介と、自分の命は一年ももたないだろうと感じている貴乃。この二人を描き出すことでこの作品は終幕を告げる。

『天北原野』は孝介・貴乃をメインに据えた物語であったが、戦争という状況を背景に描かれた壮大なドラマだった。戦争へのこだわりはやがて『銃口』という作品を生み出していくことに繋がっていく。「昭和」「戦争」にこだわる三浦綾子像がこのときはっきりと打ち出されたのである。また、「人間生まれてきた以上、幸せだけを受けるといふわけにはいかないんだ。幸せを受ける以上、不幸せも受けるしか仕方がねえ」という兼作の言葉（海の墓）は、『ヨブ記』を典拠としており、それは『泥流地帯』『続泥流地帯』にも連なるものである。

週刊連載が終わって、朝日新聞の関係者が、「とうとう孝介と貴乃を、結ばせてやらなかったのですね」と残念そうに言ったそうである（三浦光世『三浦綾子創作秘話』前出）。その思いを抱かされる読者は決して少なくないに違いない。だが、このような終わり方が余韻を残すこともまた否定できないのである。